

BOOK REVIEW

「内発的発展の道」

守友 裕一 著

今日の日本・世界の状況を考えて、いわゆる先進国での経済、国土開発が急速な拡大展開を遂げたことによって、様々な問題を生み出している。とりわけ問題となるのは、自国あるいは地域の人口の望んだ地域開発ではなく、過度な効率化や競争の原理をもとにした外來型の開発が進行した結果、大切な自国や地域の農林業生産や自然環境が破壊され、人間にも間接的・直接的な影響が生まれつつあることである。

このような地球規模の環境破壊等の問題や日本全体を取り巻くような問題を解決するためには、著者は「自らのコントロールのおよぶ足もとの生活と地域を見なおす

ことから始めなければならない」としている。つまり、本書の特徴

は、それらの問題の解決方法として「農村の内発的・地域づくりを出発点におき、地域の内発的発展とそれを支える人間発達とを統一して考えてみた」ことであり、さらに、従来の業績である関西・京都方面の都市問題の解決の手法としての内発的発展の論理と農村・農業問題解決のための論理とを繋げた視点から地域をとらえ、主体的な地域づくり（内発的発展のむら・まちづくり）を明らかにしたことである。

本書の内容を要約すると、次のとおりである。

二十一世紀に向け、時代の流れ

をどう読むかを提起し、効率性・活力の追求を行いつつも、公平性・平等性の追求も同時に行わねばならないと述べ、地域ではこの二つの実現が必要であると説く。さらに歴史的・世界的、しかも主体的・変革的に地域を捉え、リッチではなくウェルスイの豊かさを実現していくことを協調している。

すなわち、外來型の地域開発によるものでなく、従来の内発的な発展と地域に住む人びとの人間発達が必要であるという（I~V）。そして、このようなまちづくり・むらづくりの運動の到達点を豊富な地域の実態を踏まえて七点に渡って歴史的・理論的に整理している（V）。

また、最近話題となっているリゾート開発の問題点も指摘し、本来的な都市・農村の交流を柱とした「地域と国民に支持されるリゾート開発とは何か」を検討し、具体的な展望として、0円リゾート開発やミートバンク、さらにヨーロッパのツーリズムなどの都市と農村の交流、共生の事例をあげ、

ソフトツーリズムの方向を提示している（VI, VII）。そして最後に、これからの地域づくりの進路は、宮本憲一氏らの内発的発展論の限界性を踏まえ「さまざまな運動のコミュニケーションの中で、相互の才能の差異を認めあい、それを社会の共同の資産として確認していく。協同と連帯、人間発達の流れの中で地域づくり・ウェルスイの実現への道」であると説いている。

地域の人びとの生産の発展と豊かな暮らしを考え、著者はこれまで豊富な地域調査を行ってきた。本書はその成果であり、以上のような理論的・実戦的な書であるゆえに、これから地域づくりを自分の足元から取り組もうとする人、あるいはすでに実戦的に取り組んでいる人にとっては味わい深いものとなるであろう。地域づくりを考える多くの方がたに一読をお薦めする。

（本書は農山漁村文化協会発行、一九九一年三月刊、定価一、七〇〇円。評者、酪農学園大学助教授 市川 治）